ソフィスト再評価について

村　越　行　雄

はじめに

前5世紀に（とくに、前5世紀後半から前4世紀にかけての約60～70年の間）、全ギリシャ世界からアテナイに集まり、活躍したソフィストは、前4世紀にはプラトン、アリストテレスなどの出現によって、歴史の舞台から消え去ってしまった。そして、ソフィストの活動に対する評価は、哲学・思想の歴史は勿論のこと、レトリックの歴史においても、取り上げられず、忘れ去られてしまった（あるいは、抹殺されてしまった）過去の人という扱いを受けるほど、極めて酷いものであった。そのような評価は、プラトンから現在に至るまで続いており、「ソフィスト（sophist）」に詭弁家などの意味が与えられているように、軽蔑的な扱いは現在でも残っている。しかし、それで全てが終わってしまうわけではない。19世紀と20世紀は、ソフィスト再評価の動きが現れ、活発化した時である。そのような再評価の動きは、過去の歴史的事実としての確認という意味だけでなく、哲学、レトリックなどの理論化の際にソフィストの果たす役割を明確にする上でも、またソフィストの現代的意義を知る上でも、真剣に検討する価値のある対象であると言える。なお、本稿では、ソフィスト再評価そのものを具体的に、詳しく検討するというよりは、それへの前段階として、ソフィスト再評価の輪郭のようなものを大雑把に述べていくことにする。ここで取り上げるソフィストは、前5世紀に活躍したthe first sophists、あるいはthe older sophistsと呼ばれているソフィストである。

「ソフィスト」の意味範囲

「ソフィスト」のもとのギリシャ語「ソピステス（sophistes）」は、「賢い人（wise men）」を意味し、もともとは軽蔑的な意味合いなどなかった。従って、古代では、詩人、音楽家、予言者、七賢人、ソクラテス以前の哲学者などがソフィストと呼ばれたり（Kerferd, 1981, p.24; 広川洋一（1997,p.176）でも、同様のことが言われている）、またプロメテウス、ホメロス、ヘシオドス、ダモン、ソロン、タレス、ピュタゴ

ラス、アナクサゴラス、エムペドクレス、ゼノン、プラトン、ソクラテス、イソクラテスなどがソフィストと呼ばれたりした（Enos, 1996, p.682)。しかし、その後、「ソフィスト」は、軽蔑的な意味合いを持って、使われ始めた。そして、現代では、前460年から前380年までの時期に26名以上のソフィストが知られている（Kerferd, 1981, p.42）と言われているが、とくにプロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアス、プロディコス、トラシュマコス、クリティアス、アンティフォンなどがソフィストとしてよく知られている（Guthrie, 1971, pp.262-304; Kerferd, 1981, pp.42-53; Crowley & Hawhee, 1999, p.23;広川洋一, 1997, p.178; 山川偉也,1995, p.234)。その他に、アンティステネス、アルキダマス、リュコプロン（Guthrie, 1971, pp.304-314)が加えられたり、あるいはカリクレス、エウチュデモスとディオニュソドロスの兄弟、ソクラテス（Kerferd, 1981, pp.52-57)が加えられたりする。更に、*the Anonymus Iamblichi*の作者、the *Doissoi Logoi*の作者（Guthrie, 1971, pp.314-319)、それに加えて、the *Hippocratic Corpus*の作者（Kerferd, 1981, pp.54-58）がソフィストとして挙げられる。このようなプロタゴラスから始まるリストは、例えば、*Encyclopedia of Rhetoric and Composition* (Enos, 1996, p.682)のような専門的な事典にも載っており、『初期ギリシャ哲学者断片集』（山本光雄,1998, pp.94-128）にも、アンティステネス、ソクラテス、the *Hippocratic Corpus*の作者を除いて、載っている。

以上のように、「ソフィスト」という言葉が持つ意味合いの変化（軽蔑的な意味への変化）によって、ソフィストと呼ばれる人が大きく異なってくることが、明らかになる。つまり、広く「賢い人」に使用されていた「ソフィスト」という言葉が、ある特定の人々に限定されて使用され始め、現代に至っているということである。それは、Jarratt (1991, p.1）が19世紀までの約2000年の間、ソフィストは葬られてきたと言うことからも明らかなように、特定の人々に限定して使用された「ソフィスト」という言葉には否定的な意味があり、その言葉で呼ばれた人々が軽視あるいは無視されてきたということである。例えば、哲学の歴史においては、ソクラテス以前の哲学者について、広川洋一 (1997, pp.10-11）によれば、ソフィストをも対象にしているH・ディールスの『ソクラテス以前の哲学者の断片』（初版1903年）もあれば、ソフィストを対象から除くJ・バーネットの『初期ギリシャ哲学』（初版

1892年）およびG・S・カークとJ・E・レイヴンの『ソクラテス以前の哲学者』（初版1957年）もあるというように、またレトリックの歴史においては、Jarratt（1991, p.121)によれば、Robert J. Connors, Lisa S. Ede, and Andrea A. Lunsford(eds.) *Essays on Classical Rhetoric and Modern Discourse* (Southern Illinois University Press,1984)、James J. Murphy(ed.) *The Rhetorical Tradition and Modern Writing* (Modern Language Association, 1982)などではソフィストが言及されていないというように、ソフィストを軽視・無視する扱いが見られる。19世紀以降になっても、つまりソフィスト再評価の動きが活発化しているのにもかかわらず、ソフィストを対象から外す傾向が存在しているのであり、ソフィストがどのような評価を受けているかが明らかになるし、19世紀以前であれば、更に悪化した状況に置かれていたことが想像できよう。

ソフィスト評価の原点

前5世紀に活躍したゴルギアス（483-375)、プロタゴラス（481-411）などのソフィスト、そして前4世紀に活躍したプラトン（420-348)、アリストテレス（384-322）などの間には、様々な点で、非常に大きな隔たりが存在する。例えば、ソフィストの場合は、ギリシャ各地からアテナイに集まり、その後も移動を続けながら、若者に教育を行なったりして活動したのであり、ある場所に定着し、組織的に活動したわけではなかった。また、あくまでも自分の目の前にいる生きた人間に向かって、自分と同じ時代を生きている人間に向かって、教育を行なったり、それに必要なものを書いたりしたのであって、後世の人々のためとか、未来のためとかではなかったと言われている（Guthrie, 1971, pp.52-53; Kerferd, 1981, p.35; Enos. 1996, p.682）。そのことが、ソフィストが多くのものを書きながらも、20・30年の内に姿を消し、ソフィスト自身の文献が現存していない原因の一つになったと言える（現在では、他の文献などで断片的な形で見いだすだけである)。それに対して、プラトン、アリストテレスなどの場合は、プラトンのアカデメイア学園（広川洋一の『プラトンの学園アカデメイ』(1999）に当時の状況が詳しく説明されている)、アリストテレスのリュケイオン学園などのように、アテナイに自らの哲学学校を開き、そこに定着して、若者を集

め、組織的な活動を行なったのであり、プラトン学派、アリストテレス学派などと言われているように、後世の人々のために、未来のために、弟子によって哲学が継承され、文献が受け継がれて、多くが現存しているのである。そして、現存する文献量の相違は、前５世紀と前４世紀という時間的間隔以上に、ソフィストとプラトン・アリストテレスの間に大きな隔たりを作り上げてしまっている。というのは、ソフィスト解釈のためには、他の作者の文献に依存しなければならず、しかもソフィストに対して、必ずしも公平とは言えないような文献に依存しなければならないからである。

ソフィストに関して、公平とは言えない扱いをしている文献の作者としてよく挙げられるのが、プラトンであり、アリストテレスである。とくに、プラトンが幾つもの対話篇でソフィストを批判しているだけに、問題にされる。例えば、プラトンによるソフィストの描写の公平さに関する論争が今世紀激しく行なわれ、今でも続いており、それは19世紀半ばから始まったとGuthrie（1971, p.10- 13）が言い、ソフィストの活動を正確に理解する上で障壁になっているのが、ソフィストに対するプラントンの敵意であるとKerferd（1981, p.1）が言うように。言い換えれば、ソフィスト解釈に必要な情報を得るために、反対者であり、敵対者であるプラトンにいかに依存してきたか、またプラトンの文学的才能がいかに人々を魅了してきたかを示すものと言える(Guthrie,1971,p.9;Kerferd,1981,p.1)。しかし、プラトンだけが問題にされているのではなく、アリストテレスも同様に問題にされている(Guthrie, 1971, pp.51-53 ; Kerferd, 1981, p.5, p.36)。ただし、プラトンとは異なる扱いを受けることがある。例えば、アリストテレスの立場は、多くの点で、プラトンよりもソフィストの方に近いとGuthrie（1971, p.53）が言い、レトリックの歴史でソフィストが過小評価される原因として、文献不足、プラトンの非難と曲解、そしてアリストテレスによる体系化（『弁論術』、『形而上学』、『ニコマコス倫理学』など）が持つ魅力があるとJarratt（1991, xviii）が言うように。逆に、アリストテレスが思想家としてのソフィストを拒否したことで、ソフィストの活動の内、レトリックの側面のみが注目される伝統を作り上げてしまったとKerferd（1981, p.36)が強く批判する場合もある。ともかく、ソフィスト評価は、現存する文献量不足、プラトンの解釈、アリストテレスの

解釈などとの関係で考える必要がある。

文献に関しては、ソクラテス以前の哲学者（ソフィストを除く、自然哲学者など）と同じ状況に置かれているのに、哲学史、思想史などの書物を見れば分かるように、ソクラテス以前の哲学者と比較して、ソフィストの占める割合が非常に小さく（あるいは、除外されている）、それに対する不満が生まれてくる（Guthrie, 1971, p.9; Kerferd, 1981, p.14）。そして、結局、プラトンなどのソフィストの取り上げ方に問題があることになる。そのことは、ソクラテス以前の哲学者の場合と同様に、ソフィストの場合も、客観的で、学術的な研究が必要になることを意味する。

プラトンとアリストテレスの評価

ソフィストとの関係で注目が向けられるのは、主としてプラトンとアリストテレスであるが、レトリックを考える時、イソクラテス（436-338）も忘れてはいけない存在である。イソクラテスは、プラトンのアカデメイア学園と張り合うほどのレトリックの学園をアテナイに開いたのであり、彼のレトリック理論によってアリストテレスのレトリック理論が当時影の薄いものになったほどで、彼の影響力の大きさが理解できよう（Crowley & Hawhee, 1999, p.26, p.380）。しかし、ソフィストに対する関係については、必ずしも解釈が明確になっているわけではない。肯定的側面に注目して、イソクラテスをソフィストとして解釈する者もいれば、否定的側面に注目して、ソフィストとは異なる、新しい流れを作ったと解釈する者もいる（Poulakos, 1995, pp.113-114）。むしろ、それらの諸側面を持った、より複雑な解釈が必要になると言えよう。

プラトンとアリストテレスの関わり方は、どうであろうか。Guthrie（1971, pp.52-53）によれば、プラトン自身が反対者の教えを弾圧したいと思い、弟子たちがそれを弾圧したので、あるいはソフィストとは反対の哲学が不動の地位を得ていて、正統でない、問題のある考え方とみなされたものを守っていく根拠を誰も見いださなかったので、ソフィストは葬られてしまったのであり、アリストテレスが彼以前のレトリックを収集し、それらの教えを簡潔で、魅力のある文体で説明したので、もはや原作を調べることがなくなり、非常に便利な解説者とし

てアリストテレスの方を読み出したために、ソフィストは忘れ去られてしまったことになる。また、Kerferd（1981, p.36）によれば、アリストテレスが思想家としてのソフィストを否定したため、アリストテレス学派によって行なわれた一連の調査から除外され、しかもその調査がその後の主な情報源になったのであり、そして彼のレトリックの調査ではソフィストが含まれていたため、その面がとくに強調されて、その伝統が現在まで続いているのであり、それにソフィストの思想と教えが偽物であるという見方が加わって、否定・無視されてしまったことになる。そのように考えていくとすれば、前4世紀へと時代が変わり、プラトンとアリストテレスが力を拡大するにつれ、そして彼らの弟子たちがそれを継承することで、ソフィストは舞台から姿を消してしまったことになる。そのことは、思想・哲学だけでなく、レトリックにも言えることである。

そして、ソフィストに対する標準的な見方は、プラトンとアリストテレスによって決定付けられ、方向付けられ、前4世紀から2000年以上の間、継続されてきた（Kerferd, 1981, p.5; Jarratt, 1991, p.3）。つまり、彼らの評価そのものが、ソフィストに対する標準的な見方になっているということである。従って、ソフィスト評価に問題があるとすれば、それはプラトンとアリストテレスの評価に問題があることを意味し、ソフィスト再評価の動きは、プラトンとアリストテレスの評価から離れて、ソフィスト自身の立場から見ていこうとする新視点を意味する。そのことは、長い歴史の中で、プラトンとアリストテレスの目を通してしかソフィストを見れなかったこと、彼らの影響から逃れて、自立するのに2000年以上の時間がかかったこと、それほど西洋に及ぼす彼らの力が大きいことを明らかにしていることになる。Jarratt（1991,p.3）が引用したJasper Neelの*Plato, Derrida, and Writing*（Southern Illinois University Press, 1988, p.205）で言われているように、端的に言えば、西洋の思想・哲学はソフィストの否定の上に成り立っているということになる。

ソフィスト評価の実体

ソフィストの悪評は、プラトンとアリストテレスから生まれてきたものであった。まずプラトンによるソフィストへの敵意の言及箇所と

して、Kerferd（1981, pp.4-5）はプラトンの『ゴルギアス』の462B3-465e6と『ソピステス』全部を挙げている。後者については、とくに231d-e（ソフィストに関する定義の内、六つが述べられている）と最後の部分（七番目の定義が述べられている）が対象になる。次に、アリストテレスによるソフィスト批判の言及箇所として、Kerferd（1981, p.5）はアリストテレスの『詭弁論駁論』の165a22-23と『形而上学』の1004b25ffを挙げている。以上が、ソフィストに対する彼らの評価がはっきりと現れる箇所である。そこは、またソフィストに対する標準的な見方と言われているものが示されている箇所でもある。

例えば、『ソピステス』において、ソフィストは、プラトンによって、1）金持ちの青年たちを狩る、金で雇われた猟師として、2）魂についての知識を売る卸売り商人として、3）同じものを少量で売る小売り商人として、4）客のために自ら作り上げた知識を売る販売人として、5）言葉による戦いで戦う競技者で、論争に関する専門的知識を持つ者として、6）知識の障害になる考えを魂から浄める人として、7）哲学の誤った模倣者として、描かれている。6）を除けば、ソフィストへの激しい非難がはっきりと示されている。また、『詭弁論駁論』と『形而上学』において、アリストテレスによって、ソフィスト術（詭弁術）は、見かけは知識のようであるが、実は知識でないものであり、ソフィスト（詭弁家）は、見かけは知識のようで、実は知識でないものから金を儲ける人であると描かれている。そこには、プラトンと同様の非難が示されている。

上記のようなソフィスト評価が出発点となり、後に受け継がれていった。その中で、ソフィストの悪評が定着していった。例えば、ソフィストは、自分の個人的利益のために、金持ちの若者にお世辞を言ったり、だましたり、アテナイの道徳を公私両面で崩壊したり、弟子たちに野望と強欲を追い求めることを勧めたりする、詐欺師として見られるようになってしまった（Kerferd, 1981, p.5）。また、ソフィストは、強欲、自己顕示欲、詐欺といった酷い性質を持った者にされてしまった（Jarratt, 1991, p.3）。そのような悪評の中に見られるソフィスト批判の真意は、Kerferd（1981, pp.25-26）によると、次のようになる。1）プロ意識→2）お金を受け取ったこと→3）知識・徳をお金を貰って売ったこと→4）お金を払う者ならば誰でも差別なく、あらゆる種類

の人に教えたこと→5）教えを受けた者が力のある政治家になりえることという具合に、ソフィストが職業人としてプロ意識を持った者であり、そのことでそれ以前と区別することはできても、それだけで批判することはできず、プロ意識の一要素であるお金を受け取ったことも、詩人、芸術家、医者もお金を受け取っていたことを考えれば、それだけで批判することはできず、友情や感謝で十分なところを、お金を貰って知識・徳を売ったことが問題になるが、それも疑わしく、本来ならば誰を教えるかの自由を持つべきところを、その自由が奪われ、誰彼の見境もなく、あらゆる種類の人に教えたことが問題になるが、それも疑わしく、結局、教えを受けた者が現実に力のある政治家になってしまうことが最も問題で、それがアテナイのソフィストの最大の魅力であったし、同時に憎しみと攻撃の対象でもあったのであり、そこにソフィスト批判の真意を読み取ることができるということになる。簡単に言えば、ソフィストの成功への嫉みが原因ということになろう。しかし、プラトンとアリストテレスが、ただ単に嫉みだけからソフィストを批判したと考えるのは、かなり無理があると言えよう。勿論、嫉みが全くなかったということではなく、何らかの形で嫉みが関わっていたことは事実であろうが。ともかく、ソフィスト批判の真意がどこにあるかは別にして、1）から5）までの全ては、ソフィストの悪評を理解する上で、重要な要素になっていることは確かである。

ソフィスト再評価の動き

ソフィスト再評価の動きは、例えば、Jarratt（1991, xx-xxi）によれば、19世紀に、Hegelによる哲学的視点からの再評価から始まり、イギリスの功利主義的視点からのGrote、ドイツのヘーゲル的歴史観からのZellerへと続き、20世紀になって、Untersteiner（*The Sophists*, 1951）、Havelock（*The Liberal Temper in Greek Politics*, 1957）、更により最近で、広範な、バランスのとれた扱いをする古典学者のGuthrie（*The Sophists*, 1971）とKerferd（*The Sophistic Movement*, 1981）が重要な研究者として挙げることができる。そこで、ソフィストに関して、バランスのとれた扱いをしているとされるGuthrieとKerferdの意見を見ることにする。

Guthrie（1971,pp.9-13）によると、ソフィストとプラトンが経験主

義・懐疑主義対観念主義という形で明確に対立させられ、比較的最近まで、プラトンが真の哲学者で、ソフィストが詐欺師であるという見方が支配的であったが、1930年代以降から、ソフィストを進歩と啓蒙の擁護者として取り戻そうとする動き、そしてプラトンを反動主義者、権威主義者として反発する動きが見られ、その代表的な例として、ソフィストを「偉大な世代」と命名したSir Karl Popper（*The Open Society and its Enemies,* 1945）が挙げられる。そのようなプラトン攻撃は、W.Fiteの*The Platonic Legend*（1934）から始まり、R. H. S. Crossmanの*Plato Today*（1937）、A. Winspear and T. Silverbergの*Who was Socrates?*（1939）などが続き、更にE. A. Havelockの*The Liberal Temper in Greek Politics*（1957）などが挙げられるとされている。なお、プラトン攻撃に対する反論としては、R. B. Levinsonの*In Defense of Plato*（1953）が代表的例として挙げられている。また、プラトン攻撃の根拠の一つとして、ヨーロッパにおける全体主義的政府と第二次世界大戦、とくにナチズムへの批判と関連があることを指摘している。しかし、プラトンによるソフィスト描写への反発は、更に遡ることができるとしている。19世紀の中頃、Zeller（Zellerの*History*の初版、1844-52）とそれを批判したGrote（*A History of Greece from the Earliest Period to the Close of the Generation Contemporary with Alexander the Great*、6版、1888、初版はZellerのものと同時代であるとGuthrieは言う）から始まり、現在も論争は続いているとしている。

Kerferd（1981,pp.6-14）は、ソフィストの擁護者を二つのグループに分類する。一つは、Groteから始まる流れで、ソフィストを実証主義者に分類し、ソフィストの動きを共通基盤を持たない、個人レベルの活動とみなし、レトリックの教育を中心に据えるグループのことであり、もう一つは、Hegelから始まり、Zeller、Nestle（Zellerの*History*は、初版（1844-52）から5版（1892）まではZeller自身が行なったが、6版はNestle（1920)が行なった）へと続く流れで、観念主義者の伝統と言われるものに属する人々で、ソフィストの動きを共通基盤を共有する、一つのまとまりのある全体とみなし、真の哲学へと進むための必要な一段階と考えるグループのことである。なお、Kerferdは、Guthrieを観念主義者の伝統に共感しているとして、第二のグループに属させている。そして、ソフィストの擁護者の批判が展開される。

まず最初は、Hegelの*Lectures on the History of Philosophy*（初版は、1833-36）である。そこでは、ギリシャ哲学史の中の必要不可欠な地位をソフィストに取り戻したが、ソフィストの動きに対する敵意を部分修正したにすぎなかったと批判している。例えば、弁証法の正・反・合に従って、タレスからアリストテレスまでの時代を、タレスからアナクサゴラスまでの段階（正）、ソフィスト、ソクラテスなど（反）、プラトンとアリストテレス（合）に分けて、正→反→合という具合に統合されていくように、ソフィストは哲学史にとって必要不可欠な段階であるが、あくまでも次の高次の段階へと進むために否定されるものとして、しかも主観主義者として判断されてしまった。そのことが、逆にプラトンとアリストテレスの敵意を確認し、強める結果になり、また逆説的に、ソフィストに対する伝統的な見方を確認し、強める結果になってしまうとしている。つまり、真理と現実は客観的であり、それを否定する者は真理と現実に反対することとなり、単に哲学者でないというだけでなく、哲学の敵になり、それがソフィストということになってしまうからであるとしている。次は、GroteのHistory of Greece（初版は、1846-56）で、ソフィストの動きを一つのまとまりのある全体としてみなさず、個人レベルの活動として捉えることは、ソフィストを攻撃しにくくさせる一方で、擁護しにくいものにさせており、そこに問題があるとしている。更に、危険性としてKerferdが挙げているのは、ソフィストを反観念主義者の立場、実証主義、自由主義、唯物主義を予期するものとして見ていくことで、そのことが結果的にはソフィストの再評価には結びつかず、ヘーゲル的枠組みを受け入れることになってしまうとしている。従って、何の前提も作らず、注意して、ソフィスト、ソクラテス以前の哲学者、そしてプラトンに関する実際の証拠から出発すべきであるとしている。

Kerferdの主張は、基本的には、あくまでも客観的に、実際の証拠に基づいて、ソフィスト、ソクラテス以前の哲学者、そしてプラトンの立場をそれぞれ公平に判断すべきで、一方的な、偏った判断をすべきでないということである。その意味から、ソフィストの経験主義・懐疑主義とプラトンの観念主義を対比させるGuthrieも、一方的で、偏った判断とみなされ、ヘーゲル的枠組みを受け入れ、観念主義者の伝統に沿うものと思われてしまった。しかし、ソフィストの動き全体をある

表現で簡単に特徴づけることは、例えば、相対主義、人間主義という特徴づけのように、よく行なわれていることで、そのこと自体を否定することはできないであろうし、また実際の証拠についても、量的にも、質的にも限定されているだけに、客観的に判断することの難しさも理解しなければならないであろう。勿論、Kerferdの基本的態度は、忘れるべきではないが。

ソフィストの特徴

ここでは、具体的な特徴づけを行なうのではなく、全体的な傾向を簡単に触れる程度で済ますことにする。

ソフィスト再評価の動きの中で生まれたGuthrieの*The Sophists*(1971)とKerferdの*The Sophistic Movement*（1981）には、彼ら以前の再評価の動きの批判が含まれ、それを通してより適切な再評価の必要性が示されており、ソフィスト再評価が新たな段階に入ったことを意味している。それによって、ソフィストの特徴づけもより正確になり、更に真のソフィストの姿の解明に向けて努力が続けられているのが現状である。例えば、Kerferd（1981, p.2, p.7, p.8, p.11, p.13）を見れば、Hegelによる主観主義というソフィストの特徴づけを批判して、主観主義に陥らない相対主義が主張され、学派を形成せず、個々のソフィストの主義の間には共通性がないとするGroteには、ソフィスト再評価の動きにとって妨げになるとして批判し、ソフィストの経験主義・懐疑主義とプラトンの観念主義を対比させるGuthrieまでも、Hegelから続く観念主義者の伝統に沿うものとして批判するように、ソフィスト再評価の動きの中にあって、過去への批判を繰り返しながら、徐々に真のソフィスト像の解明へと近づいていく過程が理解できよう。

また、ソフィスト再評価の動きの中で、レトリックのみならず、哲学の分野においても、ソフィストの役割は認識されるようになってきた。それは、アリストテレスによる思想家としてのソフィストの否定が、レトリックの側面をとくに強調する伝統を作り上げたとするKerferd（1981, p.36）に見られるように、ソフィストをレトリックの側面から見る伝統への批判を意味する。そして、哲学の側面を考慮に入れることで、言葉だけで人を操る、内容のない詐欺師という悪評を否定することができることになる。それに、ソクラテス以前において、

タレスからデモクリトスまでは、自然哲学者と言われているように、哲学の側面から見られるのに対して、なぜソフィストが哲学の側面から見られないのかという不満も理解できよう。ともかく、レトリックと哲学の両側面からソフィストの特徴を明らかにしていかなければならないが、研究者によっては、いずれか一方により重心を置くことがある。例えば、Jarratt（1991, xx, p.13）は、ソフィストが最初の言語理論家であり、実践家であるとし、多様化された、広範囲な対象を扱うが、レトリックが中心に位置し、それ以外の全ての領域に浸透しているとしている。そして、言語理論と教育学、自然科学と認識論、社会理論と政治理論、美的反応と心理学、法律、宗教と倫理学などを対象にしていたが、アリストテレスによって学問分野としてそれぞれがまとめられて考えられた以前は、ソフィスト的レトリックが文学、科学、哲学と対立し、そして互いに入り交じった形で扱われていたと言う。つまり、レトリックというものが、多様化された、広範囲な知的・社会的活動に関わりを持ち、しかも文学、科学、哲学とは未分化状態にあったということになる。そのことは、真のソフィスト像の解明への手掛かりになるかもしれない。

結局、ソフィスト再評価の動きは、前4世紀のプラトンとアリストテレスから始まるソフィスト評価を是正する一方で、19世紀のヘーゲルから始まるソフィスト再評価を改善する過程であり、現在でも継続されている過程である。そして、その目標は、歴史的意義を正しく認識することだけでなく、現代的意義を明確にし、今の私たちにとって、どのような意味を持っているのかを見極めることである。

最後に

以上、ソフィスト再評価の検討に向けて、その前段階として、大雑把な輪郭程度のものを簡単に説明してきた。それを踏まえて、今後の検討に結びつけていきたいと思う。その際、重要なことは、ソフィスト再評価を通して、ソフィストの現代的意義を明らかにしていくことであろう。というのは、真のソフィストの姿が明らかにされれば、複雑化され、高度化された言語そして非言語コミュニケーションの中で生活している私たちに多くのことを語りかけてくれるものと思われるからである。勿論、前5世紀のギリシャ社会とは多くの点で異なるが、

それでもぼんやりとした姿から、ある種の類似性が感じられるのである。それはともかくとして、少なくとも詭弁家、詐欺師などといった悪評を取り除き、真の姿を公平な目で探し求める必要がある。その第一歩を踏み出すことが、今回の目的であった。

※本稿は、1998年度跡見学園特別研究助成金で収集した文献資料の一部を使用して、完成させたものである。更に、文献資料を使用して、今後のソフィスト研究を進めていく予定である。跡見学園女子大学に、感謝の気持ちを表したいと思う。

使用文献

Crowley, Sharon and Debra Hawhee. *Ancient Rhetorics for Contemporary Students*. Boston: Allyn and Bacon, 1999.

Enos, Theresa, ed. *Encyclopedia of Rhetoric and Composition*. New York: Garland Publishing, 1996.

Guthrie, W. K. C. *The Sophists*. Cambridge: Cambridge University Press, 1971.

Jarratt, Susan C. *Rereading the Sophists: Classical Rhetoric Refigured*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1991.

Kerferd, G. B. *The Sophistic Movement*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.

Poulakos, John. *Sophistical Rhetoric in Classical Greece*. Columbia: University of South Carolina Press, 1995.

広川洋一著『ソクラテス以前の哲学者』講談社、1997。

広川洋一著『プラトンの学園アカデメイア』講談社、1999。

山川偉他著『古代ギリシャの思想』講談社、1995。

山本光雄訳編『初期ギリシャ哲学者断片集』岩波書店、1998。

『アリストテレス全集2』、宮内璋訳『詭弁論駁論』岩波書店、1987。

『アリストテレス全集12』、出隆訳『形而上学』岩波書店、1988。

『プラトン全集3』、藤沢令夫訳『ソピステス』岩波書店、1992。

『プラトン全集9』、加来彰俊訳『ゴルギアス』岩波書店、1993。